高齢者活用連絡協議会シンポジウム

いま、求められる高齢女性が働ける場づくり・仕組みづくり

●開催日時 3月3日(水)13:30~16:30 ●会場 女性と仕事の未来館4Fホール(港区芝 5-35-3)

<概要>

高齢の女性が適職を得る機会の増加を図り、働く場を獲得するための必要条件や環境整備をテーマとしたシンポジウムを開催。少子高齢化や女性就労問題に詳しく、さまざまなメディアでご活躍中の樋口恵子氏を招いて基調講演を行なうとともに、高齢女性の働く場の開拓・拡大に取り組む各団体のパネリストによる討論会を実施しました。

当日は好天にも恵まれ、定員250名の会場は、ほぼ満席の状態に。約3時間にわたる長丁場にも関わらず、ご来場の皆さまは終始熱心に傾聴くださり、大盛況のうちに幕を閉じました。











実施プログラム

主催者挨拶

当協議会の大堀文男理事長が登壇し、高齢者活用連絡協議会についての説明と本シンポジウムの趣旨をご案内。あわせてご来場の皆さまへ御礼を申し上げ、開会を宣しました。





基調講演「超高齢化社会日本における高齢女性の就労を考える」

講師 樋口恵子氏(高齢社会をよくする女性の会理事長/高齢社会NGO連携協議会代表)

<高齢化社会・日本の現在と未来>

まずは世界一の高齢化国・日本の現状を語り、女性の就労が難しい社会風土や女性への不十分な社会保障を考え合わせると、近未来に生活困窮に陥る高齢女性層(樋口氏はBB=貧乏ばあさんと命名)が大量発生し、生活保護世帯の増加による社会資本の





枯渇が懸念されると指摘。そうした情勢に歯止めをかけるには、高齢者の経済基盤確立こそが急務であり、"老働力"が 生かされる社会への切り替えを急ぐべき、とのお話をいただきました。

<人生100年時代の新たな就労システム構築に向けて>

続いて、女性が家庭内の福祉を担ってきた旧来の日本社会の行き詰まりを指摘し、少子化抑制に成功したフランスの

事情などを紹介しつつ、「多様化」をキーワードに女性や高齢者の働き方を考察。さらに、高齢就労のモデル事例も取り上げ、働く喜びや健康維持など、労働によってもたらされる福音にもふれつつ、有史以来初の人生 100 年時代をより良く生きるべく、新たな就労システムの構築に取り組んでいこう、との呼びかけがありました。

樋口恵子氏略歴

1956年東京大学文学部美学美術史科卒業、東京大学新聞研究所本科修了。時事通信社、学習研究社、キャノンを経て評論活動に入る。1986~2003年、東京家政大学教授。2000~2003年「女性と仕事の未来館」初代館長を務める。現在、NPO 法人高齢社会をよくする女性の会理事長、高齢社会 NGO 連携協議会代表、内閣府参与、東京家政大学名誉教授など。著書:『たった一度の女の人生 待つ女から行動する女へ』(海竜社、光文社文庫)、『老い方の上手な人下手な人』、『生き上手は老い上手』(海竜社)、『私の老い構え』(文化出版局)、『対談・家族探求』(日本法規出版)、『チャレンジ』(グラフ社)、『祖母力』(新水社、講談社プラスアルファ文庫)、『人生百年 女と男の花ごよみ』(日本放送出版協会、)他多数。

パネル討論「高齢女性が創る新たな働き場・職域」

第2部では、尾崎美千生氏の司会進行のもと、高齢女性の働く場づくりに取り組む各団体の方々によるパネル討論を実施しました。まず、各団体の活動内容について語っていただいた上で、課題についても発表。子育てや介護の仕事の実態や、高齢女性の就労を取り巻く状況が浮き彫りに。また、高齢就労の場の共通課題として、社会保障や法制面の整備の必要性にも論及。さらに終盤では来場者とパネリストの間で熱のこもった質疑応答も行なわれ、充実した討論会となりました。

最後に、尾崎氏が「高齢化が進行する中、女性や高齢者の力がさらに重要となってきており、この場が世間の関心を高めるきっかけ となることを望みます」と総括。シンポジウムを締めくくりました。







コーディネーター

尾崎美千生氏(人口問題協議会 代表幹事)



略歴 1962年早稲田大学政経学部政治学科卒。毎日新聞社入社後、東京本社政治部、官邸キャップ、政治部副部長、世論調査部長、人口問題調査会事務局長、編集委員等を務める。東海大学・鶴見大学、学習院大学講師(政治学)、国連日本政府代表部専門調査員、国際協力機構(JICA)客員専門員、アジア人ロ・開発協会常務理事・事務局長等を歴任。現在、人口問題協議会代表幹事、家族計画国際協力財団(ジョイセフ)理事、高齢社会 NGO 連携協議会参与、衆院議員黒田雄氏の政策顧問。専門分野は人口問題、国際協力、政治評論。

パネリスト

鈴木道子氏(NPO法人 家庭的保育全国連絡協議会 理事長)



略歴 短大保育科卒業後、私立、公立幼稚園勤務を経て、1981年横浜市家庭保育福祉員となり、就労や病気等で昼間保育できない保護者に代わり、0~3歳までの子ども5人を預かり、自宅で保育。今年で28年となる。1992年乳幼児の健全育成、家庭的保育の充実と発展を掲げ「全国家庭的保育ネットワーク」の結成に参加。2008年、家庭的保育の普及促進を通して地域の子育て支援に資することを目的に「NPO 法人家庭的保育全国連絡協議会」として法人化し、初代理事長に就任。家庭的保育の普及、促進、定着活動に力を注いでいる。

<発表内容>

- ●きめ細かさや親しみやすさ、地域との交流など、家庭的保育(保育ママ)の長所を紹介するとともに、現状と今後の見通しを説明
- ●家庭的保育の法的位置づけの明確化をはじめ、社会的認知や支援の向上、人材や資金面の不足などの問題点を解説

吉田昭彦氏(こめつつじの会代表)



略歴 1966年東京理科大学物理学科卒。大阪市立大学工学部工学研究科博士課程単位習得退学。産業能率短期大学教授を経て、現在、介護事業所こめつつじの会代表、NPO 法人 NPO2050 テクニカルアドバイサー、高齢社会 NGO 連携協議会参与。医学博士。地球規模の環境問題について、人口問題を切り口とした立場から研究。著書:『科学者の書いた経済学の本』(中経出版)、『アマゾン熱帯雨林破壊の抜本的対策とブラジル・ノルデステの農業総合開発』(日経サイエンス1992年3月号[21世紀地球賞受賞論文])、『アマゾンで考えた私の環境貢献』(東洋経済)、『環境道のススメ』(ミオシン出版)、『シルク革命』(ミオシン出版)など。

<発表内容>

- ●東京都港区において居宅介護・訪問介護を展開する(株)こめつつじの企業概要と介護の現場、わが国の福祉の実情について語り、「自律・自立」をキーワードに、高齢女性層に向けて介護業界への就労を提言
- ●とくに都心部で顕著なヘルパーの人材難を課題に挙げ、高齢女性の就労が可能な職場であることを語るとともに、介護の仕事の意義 深さについても言及

久保律子氏(NPO法人 シニアSOHO普及サロン・三鷹 代表理事)



略歴 1972年慶応義塾大学卒業後、結婚・子育て中、日本語教師となり、大学、日本語学校で教え多くの学生を日本の大学・大学院に送り出す。また、海外から派遣された各業種のビジネスマンにも指導。その後、某ベンチャーに入り仕事をするなか、シニアSOHO普及サロン・三鷹に入会、中小企業振興公社対応のPC講座主任講師、企画、営業、プロジェクト・マネージャー、事務局長・副代表を経て2005年代表理事就任。現在は、中国でも日系企業の営業活動を展開しながら、海外でも日本語を教える。日本と上海で活動中。三鷹市高齢者社会活動マッチング協議会会長、三鷹市ユビキタス推進事業協議会副会長など。

<発表内容>

- ●三鷹市においてコミュニティビジネスを推進するシニアSOHO普及サロン・三鷹の概要を紹介するとともに、女性が活躍するプロジェクトについて説明
- ●主婦を中心とする高齢女性の就労においては保有スキルが不足しがちな点を指摘し、ビジネススキルの習得や企画力、経営力の錬磨などが課題であることを解説

上田研二(当協議会 監事/(株)高齢社 代表取締役会長)



略歴 1956年、東京ガス(株)入社。ガス関連業務を幅広く担当。1991年以降は関係会社である(株)ガスターや東京器工(株)の再建に取り組む。2000年、(株)高齢社設立。2003年東京器工(株)の再建を果たし社長を退任。同時に(株)高齢社の社長に就任。2010年2月から(株)高齢社会長。現在に至る。この間、高年齢者雇用開発協会会長賞授賞、高齢・障害者雇用支援機構のモデル企業に認定。その他様々なメディアに紹介される。2009年高齢者活用連絡協議会を設立し監事に就任。

<発表内容>

- ●高齢者派遣業の先駆けとして注目を集める(株)高齢社の成り立ち、理念、現状等を紹介
- ▶高齢女性の派遣登録者がいまだ少ない点を課題として掲げ、あわせて高齢就労のポイントや心構えについても言及



<本件に関するご意見・お問い合わせ先>

高齢者活用連絡協議会事務局

eメール info@kkrk. org